

## コロナ禍の看護大学4年生への実習に対する取り組み

藍野大学医療保健学部看護学科 松本 晃子

新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い臨地実習が困難となったことから、多くの大学において紙上事例や、ZOOMをはじめとしたオンラインツールを使用するなど多様な実習が行われております。本学においても、2020年度はほとんどの領域でスケジュールが変更となり、学生は臨地での学びや経験が少ないまま就職に臨むこととなりました。本学ではこのような実践の場を制限された4年生に対して、例年以上に就職に際し看護技術をはじめとした多くの不安があるのではないかと考え、近隣大学とともに卒業前フォローアップ研修を企画しました。このようなコロナ禍における学内実習の現状や、それに対する取り組みについてご紹介します。

### 【本学における学内実習の1例(統合看護学実習)】

紙面上患者2例について看護展開をし、計画した内容を模擬病室と設定した演習室で、人形に対して実施するように設定しました。また、登学制限やそれに伴う講義日程の調整のため、週2日の学内実習を1ヵ月かけて実施するという形になりました。緊張感の欠如もありましたが、じっくりと考察やディスカッションの時間を取れたことは多くの学びにつながりました。医療安全や看護管理など、統合看護学ならではの目標に対しては、看護部長を長年経験された教員により臨床での経験を交えた講義を行って頂きました。例年とは異なった形ですが、学生にとって学びは大きいものとなりました。これに関する学生のレポート分析を今年度のEAFONS 24thにて発表しております(Matsumoto et al. Simulated Integrated Practical Training in Japan)。

### 【卒業前フォローアップ研修】

2021年2月、4年生に就業に際し不安である項目に関するアンケートを実施しました。その結果をもとに、卒業前の3月、注射や採血、輸液ポンプの扱い方、吸引などの技術に関する演習を、本学の演習室で近隣大学の先生方と共に行いました。学生にはフェイスシールドや手袋等を配布し、十分な感染対策のもと、3時間ずつ2日間の日程での実施となりました。2日間を通し、42名の学生と19名の教員が参加しました。他大学と共に行った経緯として、臨地実習の経験が少ない学生にとって、在学中に学内以外の人と関わる経験が少なくなったことがあります。参加した学生は、知識や技術の確認だけではなく、他大学との学生や教員と交流することができました。また、学生同士においても、学生生活を終え社会に出ることに対する思いを表出しあう機会にもなり、非常に満足度の高いものとなりました。また、この研修についてNHK大阪拠点放送局から取材をしていただきました。新型コロナウイルスによって看護に対するメディアの関心も高くなっていることから、このような取り組みについて紹介できる良い機会になりました。



研修の様子

### 【コロナ禍における看護学生への教育的取り組みを通して】

臨地実習は学生において、知識や技術の修得だけでなく社会性や倫理観など人間的な成長を得ることができる貴重な機会です。それが制限されることは、学生個人の教育的な問題だけではなく、医療に携わる様々な面へ影響する可能性があります。未だ終息は見えない事態ですが、看護基礎教育としては、幅広い視野を持って、学生にできるだけ多くの学びの機会が得られるような取り組みをしていく必要があると考えております。